

# 現代中国を読む

中嶋 嶺雄

中国への着目が知識人の存在証明でもあったような時代は、すでに過去のものになったけれど、わが国の読書界における中国への関心は依然として根強いように思われる。いま私の手もとにある、過去およそ一年間に出版された現代中国関係の本は、約五十冊にものぼっている。

中国への着目が知識人の存在証明でもあったような時代は、すでに過去のものになったけれど、わが国の読書界における中国への関心は依然として根強いように思われる。いま私の手もとにある、過去およそ一年間に出版された現代中国関係の本は、約五十冊にものぼっている。

## 文革や鄧体制分析から 文明論まで根強い関心

〇〇円)があり、本書は毛沢東料を駆使した共同研究である。政治への共感を募欲しつつ今日五・四運動、文化大革命と中国の転換を直視する立場で書かれた中華人民共和国通史である。革命史に關しては、ドイツ人のコミンテルン軍事顧問オットー・ブラウンに光を当てた『革命と現代中国』(岩波新書・中国新書・五四〇円)がユニークな小著であり、中央大学人文科学研究所編『五・四運動史 未中国の青年群像』(三省堂・二、五〇〇円)も気魂のこもった論集である。文革受難の知識像の再検討(中央大学出版部一、六〇〇円)である。スター論集である。文革受難の知識像の再検討(中央大学出版部一、六〇〇円)は、最近の資料リング・シリーズ『宋王人・吳晗についての首察を含む

朝』(田畑光永訳、サイマル出版会・上下各一、八〇〇円)は、中華民国を牛耳った宋家一族の興亡をドラマチックに描いている。

当の中国では現在全面否定の文革がわが国知識人に与えた影響は絶大だっただけに、文革を問う作業も続いている。安藤正

小林文男『中国現代史の断章』(谷沢書房・二、八〇〇円)もここに挙げておきたい。竹内実・萩野脩一(編著)『中国文学最新事情』(サイマル出版会・一、八〇〇円)は文革の苦悩の逆証明として、竹内実の最新工

ツセー集『中国随想 一衣帯水』(蒼蒼社・一、六〇〇円)とも読まれるべきであろう。この一月の胡耀邦失墜という政変に見られた鄧小平体制下の中国の政治経済動向をさらえるためには、ルネ・デュモン『脱

之『中国の政治社会』(蒼蒼社・三、〇〇〇円)は、徳田敦之を主査として『中央』地方関係)を共同研究した成果『中国文明と日本』(福武書店・二、二〇〇円)および加藤祐三編『アジアの都市と建築』(鹿島出版会・二、八〇〇円)を逸する。この二冊は、中国の政治経済動向をさらえるためには、ルネ・デュモン『脱集團化』(向かう)と『服部伸和気弘(編著)』(胡耀邦という中国) (蒼蒼社・一、二〇〇円)も好タイミングの出版であった。一時多かつた中国経済に関する『日本経済』(垂記書房・二、八〇〇円)が刊行された。私自身の二、三の新著については言及を避けたいが、旧著『現代中国論』(青木書店)はこの春も版を重ねた。定価は初版(一九六四年)の五八〇円が三、三〇〇円にもなってしまう。『現代中国論』(青木書店)は、この春も版を重ねた。定価は初版(一九六四年)の五八〇円が三、三〇〇円にもなってしまう。『現代中国論』(青木書店)は、この春も版を重ねた。定価は初版(一九六四年)の五八〇円が三、三〇〇円にもなってしまう。



政治、社会、文学——中国への関心は高い。『現代中国論』(青木書店)は、この春も版を重ねた。定価は初版(一九六四年)の五八〇円が三、三〇〇円にもなってしまう。『現代中国論』(青木書店)は、この春も版を重ねた。定価は初版(一九六四年)の五八〇円が三、三〇〇円にもなってしまう。

## 「新人類」へ二つの接近

ジュがあいついで出版された。一冊は石川好著『青春の探究 いわば「標準レンズ」を用い、

観念に過剰な形ではとられたくないという山際の姿勢の表明

## 高齢化社会の現状

右のような本が示す激動の中(学) (東京外大教授・現代中国